

平成28年度 中国ブロックカンントリーミーティング(in 広島市)



Style-KAIGO “ニッポン一億”

～地域共生社会をつくる日本型介護・福祉～

速報！！

大会概要

平成28年11月28日(月)29日(火)、広島市「ホテルメルパルク広島」において253名(全国老施協 中国ブロックの役員等含む)の参加により「平成28年度中国ブロックカンントリーミーティング(in 広島市)」を開催した。



全国老人福祉施設協議会から、松本敦副会長、木村哲之21世紀委員会委員長、森山義弘21世紀委員会副委員長、野口恭子21世紀委員会委員、河原至誓介護人材対策委員会幹事が出席し、情報交換会には、園田修光理事・参議院議員も駆けつけてくださった。

Style-KAIGO “ニッポン一億”～地域共生社会をつくる日本型介護・福祉～をテーマに2日間にわたり熱い議論を交わした。

開会式では、広島市老人福祉施設連盟 藤井紀子会長が歓迎のことばを述べ、続いて全国老人福祉施設協議会 松本敦副会長並びに中国地区老人福祉

施設協議会 小泉立志会長より、主催者挨拶を行った。

また、来賓として、広島市健康福祉局高齢福祉部 松井勝憲部長、広島市社会福祉協議会 永野正雄会長をお招きし、松井部長から「来年は新たな介護保険制度改正・報酬改定のための大切な年、現場の課題を発信していくことがニーズに合った制度づくりにつながる。不安を解消し、希望を構築するカンントリーミーティングとなるよう、仲間をつくって、元気になって帰ってほしい。」と、来賓のご挨拶を賜り、エールを送っていただいた。

趣旨説明

全国老施協21世紀委員会 木村哲之委員長から趣旨説明があり、「平成13年より15年にわたって現場の声を集積し、タイムリーな課題に向き合ってきた「21世紀委員会カンントリーミーティング」は、わが国の介護・福祉のこれからを担うリーダーが集う現場発信の舞台であり、「現場の声が制度をつくる」原動力・情報発信と想像の拠点となっている。この15年間で増えた仕事1位は、介護職員98万人であり、訪問介護従事者や看護助手など、高齢者介護分野は急成長している。10～20年後、わが国の労働人口の約半数が人工知能(AI)で代替可能とされるなか、介護関係職種は代替可能性の低い職業とされている。21世紀を生き残り、次代へ繋げていきましょう、日本を変えていきましょう！」と述べた。



基調報告・インプット

続いて、全国老施協21世紀委員会 木村哲之委員長から基調報告があり、超少子高齢・人口急減時代の社会的背景について、費用の抑制から効率化・重点化が進められる社会保障制度改革について説明の後、27年度報酬改定にふれ、「経営悪化、人材不足に陥る施設・事業所の現状について、平成27年度収支状況調査結果の速報として、特養の収支差額3.0%(国庫補助金等特別積立金取崩額を除く収支はマイナス1.1%)であり、制度移行後、最低の収支差額となっている。赤字施設は32.4%存在し、人件費比率70.5%である。(赤字施設は人件費比率76.5%、黒字施設は67.7%)また、国は、“ニッポン一億”がみんな活躍できる社会として、我が事、丸ごと地域共生社会の実現に向けた方向性を示しており、地域共生社会は、介護職員のような心をもった人たちでなければ到底実現できない。介護職員は“地域共生社会人モデル”素晴らしい「日本式KAIGO」は、新しい日本をつくる力がある！誇りを持って、誠心誠意私たちの介護を前進させましょう！」と、力強い報告があった。

次にインプットとして、全国老施協21世紀委員会 森山義弘副委員長から説明があり、さまざまな介護施策が動き出すなかで、希望あるニッポン社会の実現のために、私たち当事者世代は未来型介護に向けて経営戦略をどのように提案し、どう制度につなげていくか、10のバズワード「①介護保険制度・介護報酬②ロボット・ICT③人材戦略（採用定着）④地域を支える福祉論⑤海外戦略・海外人材⑥業務効率化・無駄解消⑦介護保険外事業⑧日本式KAIGO⑨ブランディング（イメージアップ）⑩危機管理」と3つの視点「(1) Management 未来型介護の実現に向けた経営戦略(2) Welfare 地域に求める福祉の引率者像の実現(3) human 介護する人、受ける人、関わる人が1億通りの介護を考える」について説明があった。

また、参加者に対して、「当事者として強い信念を持って欲しい。また、他者の意見を聞いて視野を広げるとともに、発想力と柔軟性により多様なアイデアを生み出す場、夢を語り合う場にしてほしい」と激励された。

分科会グループディスカッション

4つの会場に分かれ、それぞれ各グループにおいて活発な議論がなされた。

【分科会場A】(①介護保険制度・報酬改定、⑨ブランディング、⑩危機管理（ブロック独自ワード）)

助言者；中国地区老施協 小泉立志会長

助言者・サポーター；全国老施協21世紀委員会 森山善弘副委員長

進行；岡山県老施協21世紀委員会 池田英樹委員長

記録；岡山県老施協21世紀委員会 仁木則子副委員長

バズワード①「介護保険制度・介護報酬」《18名,3グループ》

加算取得についての努力は、即ち利用者の生活の質向上の為の取り組みであり、利用者の利益が正当に評価される仕組みでなくてはならない。

人材確保・育成困難な現状で、経験が長く良質なケアができる等一定要件の職員を確保し、育成に成功している事業所にインセンティブを与える仕組みが必要。

利用者の生活の質向上の為に必要な人材が長く働き続けられる加算等の創設を願う。

処遇改善加算についても多職種協同の原則より、介護職員だけではなくその他の職員も対象とし、専門職が専従で業務が行えるよう人件費の確保等の体制を構築してほしい。

バズワード⑨「ブランディング」《19名,3グループ》

介護の業界は、自らをプロデュースしてイメージ戦略の苦手を克服し、SNS等を活用して一層情報発信する必要がある。

カイゴレンジャーといったキャラクター等、小さな頃から身近に感じてもらえる働きかけの工夫や町コンなどのイベント企画、地域貢献やボランティア等地域に出向き、イメージアップを図る。

また、介護がブランド力を持つには、介護の専門性の確立が必須であり、自主的に研鑽を重ねサービスの質と介護職員の地位向上が介護業界全体のイメージを押し上げる、仕事人としてカッコイイ専門職としての地位を築いていきたい。

何かを一つでも変える仕組み作りを自らが取り組まなければならない。

バズワード⑩「危機管理」(ブロック独自ワード)《14名,2グループ》

未曾有の災害が各地で起きている現状で、想定外の事態の対応に事業所単体では限界がある。国や地方自治体からその地域ごとに適したガイドラインを示してほしい。

身近な自治体に災害対策の協議等と呼び掛け、地域ケア会議等で共有するなどの取り組みが必要である。警察や消防署と協同して研修や訓練、防犯・防災についても協議する場を作る等日ごろからコミュニケーションをとって連携する体制づくりをする。

災害等以外でも介護事故等の緊急時の対応に職員の質向上は欠かせないので、日常的なマニュアルの実施訓練などが求められ、一人一人が目的や目標をもって仕事をする職場風土を醸成していきたい。

以上の発表を受け、全国老施協21世紀委員会 森山副委員長から、ブランディングでは東京での取り組

み事例の紹介を通して新たな発想が求められていること、危機管理においては、地域の特性を把握・分析して対応をする必要と、団体として取り組むことと地域ごとにその特性に応じて取り組むことの両面を考えたことの助言をいただいた。

また、中国地区老施協小泉会長からは、人材の質を上げるとともに個々の目標が明確であれば介護事故が減少する。ブランディングについてはキャラクター等のイメージ戦略も重要だが、介護の地位を上げたいという職員一人一人の志にかかっている。利用者の生活の向上が前面にできるような努力を期待する。一生懸命な職員が疲弊したり離職するような仕組みはおかしいので頑張っている事が報われる仕組み作りを発信したい。利用者の生活とサービスの質向上を原点においてほしいとの助言をいただいた。

【分科会場B】(②ロボット・ICT、③人材戦略、⑧日本式K A I G O)

助言者；全国老施協 松本敦副会長

サポーター；全国老施協介護人材対策委員会 河原至誓幹事

進行；鳥取県老施協21世紀委員会 佐々木政治委員長

記録；鳥取県老施協21世紀委員会 石賀康文副委員長

パスワード②「ロボット・ICT」(17名,2グループ)

ドラえもん の 4次元ポケットのように「こんなものがあつたらいいな」というような自由な発想からスタートし、画像と連動しているナースコールや音声で記録ができるソフト、また、困ったときに音声で介護方法のアドバイスをくれる機能などのアイデアが出た。しかし、現場が本当にほしいロボットがない現状もあり、現場の声とロボット産業とのパイプ役となるコーディネーターが必要との意見がでた。



パスワード③『人材戦略』(39名,5グループ)

「介護のイメージアップ」「働きやすい環境の整備」などの意見が出された。

若い世代に興味を持ってもらえるようにSNSを活用する。また、子育て世代の人材確保のため保育施設の整備など働きやすい環境・勤務形態の導入。

長期的な視野で、子供たちに介護を身近に感じてもらえるよう学校への働きかけも重要という意見も上がった。

パスワード⑧『日本式K A I G O』(10名,1グループ)

自立支援を目標とした『おもてなしの介護』『気配り・目配りができる介護』『申し訳ないと思わせない、さり気ない・気遣いの出来る介護』が日本式のK A I G Oとの意見が上がり、介護業界全体で理想を共有し、具現化する研修体制を整えることが必要との結論が導きだされた。

以上の発表を受け、サポーターの河原幹事より、『ロボット・ICT』では、使うのは人であり「どうして導入するのか」しっかりと目的を現場に伝えることが重要であること。また、作り手側と現場との距離が遠く「現場が何を喜ぶかわからない」状態である。「こういうことで困っている」と作り手側に伝えることが大切である。『人材戦略』については人材育成が特に重要で、育成により職員が定着すれば新規採用費も減り、定着した職員のスキルがアップすれば少ない人数で運営ができ、職員の処遇を改善することができる。そのため育成担当者の教育が重要であるとコメントをいただいた。

また、助言者の松本副会長からは、囲碁で人工知能が人間に勝った例を挙げられ、10年前に実現できないうちで実現されている。10年後どんな社会にしていけるか一緒に戦略を考えていきたいと思いますと分科会を締めくくられた。

【分科会場C】(④地域を支える福祉論、⑦介護保険外事業)

助言者・サポーター；全国老施協21世紀委員会 木村哲之委員長

進行；広島県老施連21世紀委員会 原本一委員長

記録；広島県老施連21世紀委員会 駄賀健治副委員長

パスワード④「地域を支える福祉論」(30名,4グループ)

我々の施設が地域を支えていくためには、地域と施設が顔馴染みの関係を構築し、地域の方がどんなことでも気軽に相談できる施設でなければならないといった意見が出た。

しかし現実には、地域と施設の間には距離感があり地域の方々のニーズが拾えておらず、職員も地域に出ていくモチベーションを高く持たず、地域との関係構築は十分ではないという問題があがり、人手不足やネットワークづくり、PR 不足といったことが原因としてあげられた。

課題として、組織全体の地域公益活動への意識をどのように高めていくことができるか、また、その担い手をどう育成していくかといった視点で議論が展開された。

具体的な取り組みとして、こちらから地域に出向いていき、地域のニーズを把握し、情報発信もこれまで以上に行っていくことが必要である。また、地域と施設をつなぐ担い手となる職員の育成に取り組み、自信を持って地域と係わることのできる施設を創っていかなければならないとの意見があがった。

パスワード⑦「介護保険外事業」(8名,1グループ)

団塊世代の高齢化により、ニーズは多様化しており、介護保険内外問わず、利用者の多様なニーズに応えつつ質の高いサービスを提供できることが大切であるといった意見が出た。

しかし、現実には、営利で行うのであれば、低所得者への対応といった問題が生じ、非営利であれば、地域によって利用できる社会資源に限りがあるといった意見があがった。

取り組みとして、利用者のニーズを把握し対応していくために、混合介護等の課題解決のためにソーシャルアクションをおこしていく必要があること、地域のボランティアを活用していくことも必要であるとの意見があがった。

まとめとして、介護保険外事業については、地域公益活動と一体的に考えていくことが大切である。日頃から地域と施設が係わりを持ち、施設のハード面をどう活用していくか、地域の資源をどう利用していくかが鍵となるとの意見があがった。

以上の発表を受け、助言者の木村委員長から、このグループの答えは一つだけでなく、地域の数だけ、またはそれ以上の答えがある。

地域共生社会を考える視点として大切なことは、地域を支えることが、仕事の範囲でできること、つまり給料をもらってできる範囲でできることになっていないか。施設の職員である前に、地域の一員として、仕事を離れたときに何ができるのか、それを考えるきっかけをいただいた。

【分科会場D】(⑥業務効率化・無駄解消)

助言者・サポーター；全国老施協 21 世紀委員会 野口恭子委員

進行；島根県老施協 松本英昭理事

記録；島根県老施協 國頭正久理事

パスワード⑥「業務効率化・無駄解消」(46名,6グループ)

理想としては、利用者に寄り添った介護がしたい、利用者に関わる時間がほしい、記録、記入を業務時間内に終えたい等の意見が多く出た。しかし、記録や介護に追われ利用者に関われない、パソコン等を苦手とする職員がいるため手書き作成になってしまい時間がかかり、利用者に関われない現実が浮かび上がった。

この課題解決のために、できること、やらなくてはならないこととして、介護ソフトなどを導入して PC 化を進め、記録の簡素化を図り、利用者に関わる時間を確保していく。そのためには、デジタル化に抵抗のある職員へ優しく教え、研修会を開催する。掃除、ゴミ捨て、洗濯などの雑用業務については、これに特化した短時間労働のパートや学生アルバイトを確保する。加えて雑談も大事にしながら、報告・連絡・相談を意識して情報共有をはかり、意識統一をしていくことが必要ではないかということにまとまりました。

以上の発表を受け、野口委員から、「見直す時間もない、職員間の温度差があり、なかなか進まないのが現実ではあるが、厳しい中でも業務改善に取り組んでいかなければならないのは、2025 年には介護職員が 37 万人不足する、今以上に厳しい時代がやってくるからである。いくら技術革新が進んでも、人の力・思いがあって初めて成り立つ職種だということ念頭に置いて、根拠を考えていかなければならない。

人材育成については、育てる時間がなくても、少しずつでも人を育てることが、いずれ自分たちのためになる。大きな改革は難しくても、現場の些細なこと何か一つでも変えるために取り組んでいくことが、ひい

ては国を動かすことに繋がっていく」と、助言をいただいた。

情報交換会

情報交換会では、全国老施協 松本副会長の開会挨拶に始まり、参議議員で全国老施協 園田修光理事よりご挨拶をいただいた。来賓として、広島市社協 永野正雄会長並びに翌日の記念講演講師 プロ棋士の今泉健司四段に出席いただいた。永野会長による乾杯の発声で、盛大に開会した。

また、広島市老施連 碓井法明顧問から歓迎の言葉と、参加者への力強いエールを述べられた。

分科会と同じグループにて参加者相互の交流を一層深めるとともに、グループディスカッションに引き続いた活発な意見交換と情報交換がなされ、広島市老施連 副会長でカントリーミーティング実行委員会 渡部実行委員長の挨拶により中締めとした。

アウトプット・総合ディスカッション

報告者：岡山県老施協 21 世紀委員会 池田秀樹委員長
鳥取県老施協 21 世紀委員会 佐々木政治委員長
広島県老施連 21 世紀委員会 原本一委員長
島根県老施協 松本英昭理事

コーディネーター：全国老施協 21 世紀委員会 木村哲之委員長

コメンテーター：中国地区老施協 小泉立志会長
全国老施協 21 世紀委員会 森山善弘副委員長
全国老施協介護人材対策委員会 河原至誓幹事



2 日目の全体会では、各分科会場・バズワードごとに討議された結果を報告し、その後総合ディスカッション形式でコーディネーター並びにコメンテーターから提言がなされた。

主に質の評価について、職員の定着率が良く、質の高い職員がいる施設が、当然良い施設であると言えるが、現状の報酬体系では評価されず、経営が人件費比率 75%以上ある施設もあり、経営を圧迫している。この現状を国に訴えていくことを約束された。

「日本には経営がない」「経営とは日々変えていくこと」というカルロス・ゴーンという言葉が引用され、今、介護業界も改善

に向け、日々変わっていく必要がある。経営力をつけていくことの重要性について力説された。

「人がいない」「時間が無い」という発言は思考停止ワードである。介護業界全体に蔓延している病巣のようなもので、業界全体の発展の為にもこのようなワードは使用せず、法人、施設、職員一人ひとりが、プレゼン能力を向上させ、自らの強みや魅力を地域や世間に情報公開していくことが重要である。

以上のことが介護業界全体でできるようになれば、業界は絶対に変わっていくというコメントをされた。

最後に、専門職としての地位構築に、時間をかけ確立していった「看護協会」を例に挙げ、根拠に基づいたケアを業界全体が行うこと、自主研鑽を重ねることで、サービスの質と介護職員の地位向上が図られ、介護業界全体のイメージを上げることに繋がる、というコメントで締めくくられた。

記念講演

テーマ：夢をあきらめない力 ～介護士からプロ棋士へ

講師：今泉 健司氏（プロ棋士（四段）、元介護士）

本を読むことが好きだった少年時代、本から将棋を学び、極度の負けず嫌いで、独学の下、父親に1勝出来た、感動を熱く語られた。それを機に将棋のプロを目指そうと決心し、14歳で単身大阪に移り住み、関西奨励会へ入会した。自分では26歳までに当然のようになれると思っていた三段から四段への昇段が、出

来ず、年齢制限で退会した。

退会後は一般の方を対象とした将棋の講師や、自分に合わない調理員として働きながら、アマチュア大会に挑戦した。

2007年には年齢制限ルールに変更があり、チャンスが訪れた。再度、関西奨励会三段リーグ編入試験で奨励会復帰。その時33歳であった。

しかし、2年以内に四段昇段という条件を満たせず、再び退会となり、プロ棋士の事を一度は諦めた。結局のところ中卒で手にも職がなく、途方に暮れていた時、介護の求人募集に応募し、声が大きく挨拶が素晴らしいという事で採用になった。認知症の介護も全く分からず周りのスタッフに支えてもらった。この仕事を通じ、高齢者の温かさ、一緒に働く仲間の優しさに触れ、自分の中で他人を責める事や、自分自身を諦める事をしなくなった。

4年間介護を続ける事で、他人に感謝する気持ちが芽生え意識が変わった。アマチュア大会に再チャレンジして、プロ編入試験資格を得る事が出来た。戦後最年長(41歳)のプロ棋士となり、現在2年目を奮闘中であると熱く語られた。

今泉四段は自分の人生を振り返った時、七転び八起きだと言われた。「あの時、ああしていれば」の繰り返しだったと語られた。

転機の度に素晴らしい人との出会いがあり、ご縁に助けられて、ここまで歩いてくることができた。その人生を振り返り、幸せだと述べられた。

特に介護は高齢者からパワーをもらえる仕事だと思っている事を述べられ、考え方が180度変わって、「人間は幸せになる為に生まれてきている」と実感し、負の感情も一旦は受け入れて自分の中で消化し、ポジティブな思考が出来る様になった。毎日、感謝の気持ちで過ごしている。

常に笑顔いっぱい、エネルギッシュに話す今泉四段に大きな拍手が送られ、明日からの活力をチャージできた講演であった。



閉会

閉会にあたり、広島市老人福祉施設連盟 松林克典副会長から、参加者への感謝の言葉を述べた。

本カントリーミーティングで培った人脈と介護に携わる活力をそれぞれの地に持ち帰り、明日から現場力として福祉・介護の向上に役立てていただくことと、参加者全員の活躍を祈念し、2日間の中国ブロックカントリーミーティングを締めくくった。